



ニューテクノロジー振興財団 設立20周年
記念座談会【前編】

マイクロマウスと 共に歩いた20年

ニューテクノロジー振興財団は、今年12月24日で設立20周年を迎えます。
財団設立以前からその運営に携わり、
財団の主たる事業として育ててきたマイクロマウス競技会も今年で27回目を数え、
四半世紀の歴史を共に歩んで来ました。
そこで財団設立20周年という節目に当り、
マイクロマウス創世期に関わって頂いた方々にお集まり頂き、
当時の懐かしいお話を伺いながら、
マイクロマウスの今後、また財団の将来展望について語って頂きました。



MAPPY:©NBGI

先川原—まず始めに、マイクロマウスの歴史はマイコン性能が加速度的に進化する時期と一致します。しかもロボコンという言葉が生まれる遙か以前にできた世界最古の、今も尚続いている一番古いロボコンであると僕は思っているのですが。そこで、マイクロマウスの第一回目を始めるきっかけはどのような事だったのか、お聞きましょう。

田代—2つきっかけがあって、一つは当財団の理事長でもある中村雅哉が、当事20代だった平社員の私を呼びつけて、「世間ではロボットを作っているアマチュアの人がたくさん居るようだ。その人たちの発表の場を提供してみたらどうかね」と言われ、早速、科学技術館に相談に行くものの準備不足でその年は流れ、それで翌年にイベントとし

て開催したのが1979年の全国ロボット大会です。
もう一つはその前年(78年)創刊の月刊アスキーの編集長、
吉崎さんとの出会いで、たまたま見せられたのがアメリカで
のマイクロマウスの写真だったのです。

先川原—ということはマイクロマウス大会の前に「全国
ロボット大会」というのがあった訳ですね。

田 代—そうです。当時、我々はロボットに関して全くの
素人で、とりあえず多くのロボットを集めるように行き当たっ
たのが油田先生の山彦ロボットでした。第一回の全国ロ
ボット大会では、科学技術館から竹橋駅まで入場者が並
ぶ大盛況で、科学館始まって以来の入場者数でした。子
ども達のハリボテのような作品もたくさんあった中、山彦の
ように迷路を抜けるロボットが数台あって、マイクロマウスは
行ける!と油田先生等に協力をお願いし、開催されたのが
80年の第1回全日本マイクロマウス大会です。

先川原—ということで、後々まで競技委員長としてもご活
躍頂いた油田先生にご登場頂きましょう。

油 田—第1回当初から及び腰の参加で、正直言ってこ
んなに長くやるとは…(笑)。

先川原—当時の記録を見ると、出走者18台、完走者ゼロ
ですね。

油 田—で、完走者ゼロの後、遅れて来た方がサラッと
完走しちゃってね。(笑)

田 代—当時は一週間強のイベントで、大会終了後2~3
日して蒲田の電子工学院の学生さんがフラッと来て、走ら
せてくださいって言うから走らせたらなんと完走しちゃった
んです。どうやら学園祭に展示をして参加出来なかつ
たとの事。実は幻の第1回優勝者が居たんですよ。(笑)

先川原—そんな裏話が第1回にはあったんですね。

油 田—話を元に戻すと、当時アメリカのIEEEと言う学
会のコンピュータサイエティが全くの技術チャレンジとして、
マイクロマウスという名で迷路を抜けるロボットを作るという
課題を出した。結果として1977年に第1回大会、1979年
に全国大会まで広がりましたが、アメリカでは技術チャレン



油田信一

筑波大学
システム情報工学研究科 教授

マイクロマウスとの付き合いは、第1回
(1979年)の全国ロボット大会で自律ロ
ボット「山彦」で迷路脱出を披露して以
来マイクロマウス競技会実行委員長とし
て運営指導



先川原正浩

千葉工業大学 未来ロボット
技術研究センター 室長

理工系出版社、ロボット専門誌編集長
を経て現職在職中ロボット関連イベント
のプロデュース、TV・新聞・雑誌・書籍
の企画を多数手がける



麦田憲司

日本システムデザイン株式会社
代表取締役

第1回マイクロマウス大会より参加
第2回マイクロマウス大会優勝



New Technology Foundation
The 20th Anniversary

ジとしては大成功し、その段階で大会の開催目的は達成したと終了しました。

先川原—マウス発祥の地アメリカでは続いているんですね。

油 田—そうです。ところが面白いからとそれを受け継いだのがイギリスにも居た。ユーロマイクロというイギリスの学会で、学術的にも左手法ではなく、真ん中にあるゴールに到達するという難易度の増した問題設定でした。日本の第1回大会はその規則を踏襲したもので、アメリカで左手法は成功したけど、これはまだ世界で成功していない競技という気持ちがありました。

田 代—その後アメリカに世界大会参加を要請したときには、もうそんなアメリカでは終わったよと言われましたね。

油 田—アメリカでは難易度の高い技術課題を公表し、それを実現したらフロンティアは終了と言う性格で、僕らは作るのが面白いじゃないかという気持ちが強かった。だから田代さんから競技会のお誘いがあった時、参加することになったんだと思います。

先川原—日本がルールを踏襲したイギリスでは続いているのですか。

田 代—10年近く続いたはずですね。1985年に筑波の世界大会開催にヨーロッパからも参加してもらいましたが、彼らからすると日本に先行している自負があったのに、日本のマウスにスピードでは全く敵わなかった。スピードは日本が速いけど、ヨーロッパのマウスの方が賢い、とか言って少し拗ねてしまって。(笑)

油 田—ヨーロッパでは学会が中心で、当時のマイクロマウスは技術チャレンジとして大学の先生が給料をもらいながら、与えられた課題としての取り組みだったので長続きしなかった。命がかかっていない。(笑)

先川原—命がかかっていないというのはどうかと思いますが(笑)、参加者側の意気込みとしてはどうだったのですか。

麦 田—機関誌マウスの創刊号にも書いていますが、私は大学に7年通いましたが全く勉強しなくて、当時大学卒

業して家業に就職したものの目標がなく悶々としていました。そんな時、田代さんがマイクロマウスを立ち上げて、それに食いついて(笑)。

先川原—マイクロマウスで人生が変わったひとりですね。(笑)

麦 田—本当そうですね。偶然アスキーの募集記事を見つけて、今は山ほど情報がありますが、当時は本屋さんに一冊ぐらしか資料がない。福山だったらマイコンクラブ、ここに行けば教えてくれると思って尋ねたらマウスのことなんて誰も知らなくて。でも仲間がそこには居て、マウスの面白さを感じて、最初の会合で参加しようとなりました。これが福山マイコンクラブとの出会いです。募集記事は大会の数ヶ月前で、確か当初はマイコンが貸与されたんでしたね。

田 代—当時オリジナルでは難しかろうと、コンピュータメーカー数社にワンボードマイコンを提供してもらい、必要なら貸し出します、それでマウス作ってきたら差し上げます、という参加者募集企画でしたよね。

麦 田—で、貰ってみると8085って何だっってところから始まる。(笑) 開催まで数ヶ月、何もできる訳がないので、結局最初は形を何とか1ヶ月程度で作って、ボードを載せてようやく参加できた、というのが一年目でした。それからですよ、次の開催までの1年間本当に勉強して、寝ても覚めても考える。ああいう時ってものすごく吸収するんですよね、大学時代7年分くらいの勉強はしたと思います。(笑)

先川原—大学時代を一気に取り戻しましたね(笑)

麦 田—結果、運よく2回目の大会で勝ったもんで、ハクが着いて。(笑) そういう機会を与えてくれたのがマウスで、その時それだけやってなかったら、今の仕事ができなかったでしょう。仕事の上でも様々なメリットがあって、現在でも好きな仕事ができている訳です。今の人を見ていると情報がなかった時代はある意味幸せだったと感じます。それだけのめり込む事ができる。ハングリーと言うか、製作に集中できるんです。

先川原—先ほども出た命がけになっている訳ですね(笑)



田代泰典

財団法人ニューテクノロジー振興財団
事務局長代理
(兼) 株式会社ナムコ
人類遊び研究所事務局担当

株式会社ナムコ入社後日本で初めての
ロボット競技会「全日本マイクロマウス
大会」を開催、その後財団の設立を行う



中編に続く
(taidan_02.pdf)